

白

芥川龍之介

青空文庫

ある春の午過ぎひるです。白しろと云う犬は土を嗅かぎ嗅かぎ、静かな往来を歩いていました。狭い往来の両側にはずっと芽をふいた生垣いけがきが続き、そのまた生垣あいだの間にはちらほら桜なども咲いています。白は生垣に沿いながら、ふとある横町よこちょうへ曲りました。が、そちらへ曲つたと思うと、さもびつくりしたように、突然立ち止つてしまいました。

それも無理はありません。その横町の七八間先には印半纏しるしばんてんを着た犬殺しが一人、罌わなを後うしろに隠したまま、一匹の黒犬を狙ねらつています。しかも黒犬は何も知らずに、犬殺しの投なげてくれたパンか何かを食べているのです。けれども白が驚いたのはそのせいばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しに狙ねらわれているのはお隣の飼かいい犬ぬの黒くろなのです。毎朝顔を合せる度にお互たがいの鼻においの匂においを嗅かぎ合う、大の仲よしの黒なのです。

白は思わず大声に「黒君！ あぶない！」と叫こゝろぼうとしました。が、その拍子ひょうしに犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教えて見ろ！ 貴様から先へ罌わなにかけるぞ。」――

犬殺しの目にはありありとそう云う嚇しが浮んでいます。白は余りの恐ろしさに、思わず吠えるのを忘れしました。いや、忘れたばかりではありません。一刻もじっとしてはいられぬほど、臆病風が立ち出したのです。白は犬殺しに目を配りながら、じりじり後ずぎりを始めました。そうしてまた生垣の蔭に犬殺しの姿が隠れるが早いか、可哀そうな黒を残したまま、一目散に逃げ出しました。

その途端に罾が飛んだのでしよう。続けさまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、往來どめの縄を擦り抜け、五味ための箱を引っくり返し、振り向きもせず逃げ続けました。御覽なさい。坂を駈けおりのを！ そら、自動車に轢かれそうになりました！ 白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れませんが、白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声が虻のように唸っているのです。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

白はやつと喘ぎ喘ぎ、主人の家へ帰つて来ました。黒堀くろべいの下の犬くぐりを抜け、物置小屋を廻りさえすれば、犬小屋のある裏庭です。白はほとんど風のように、裏庭の芝生しばふへ駆けこみました。もうここまで逃げて来れば、罨わなにかかる心配はありません。おまけに青あおした芝生には、幸いお嬢さんや坊ちゃんもボオル投げをして遊んでいます。それを見た白の嬉しさは何と云えば好いのでしょうか？ 白は尻尾しっぽを振りながら、一足飛びいっそくとにそこへ飛んで行きました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ 今日犬殺しに遇あいましたよ。」

白は二人を見上げると、息もつかずにこう云いました。（もつともお嬢さんや坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。）しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんもただ呆気あつけにとられたように、頭さえ撫なでてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！ あなたは犬殺しを御存じですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりましたが、お隣の黒君は掴つかまりましたぜ。」

それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見合せているばかりです。おまけに二人はしばらくすると、こんな妙なことさえ云い出すのです。

「どこの犬でしょう？ 春夫さん。」

「どこの犬だろう？ 姉さん。」

どこの犬？ 今度は白の方が呆氣にとられました。（白にはお嬢さんや坊ちゃんの言葉もちやんと聞きわけることが出来るのです。我々は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我々の言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。犬が芸を覚えるのは我々の言葉がわかるからです。しかし我々は犬の言葉を聞きわけることが出来ませんから、闇の中を見通すことだの、かすかな匂を嗅ぎ当てることだの、犬の教えてくれる芸は一つも覚えることが出来ません。）

「どこの犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

けれどもお嬢さんは不相変あいかわらず気味悪そうに白を眺めています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちやにしながら、考え深そうに答えました。

「こいつもからだじゅう体中まっ黒だから。」

白は急に背中さかだの毛が逆立つように感じました。まっ黒！ そんなはずはありません。白

はまだ子犬の時から、牛乳のように白かったのですから。しかし今前足を見ると、いや、——前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足も、すらりと上品に延びた尻尾も、みんな鍋底のようにまつ黒なのです。まつ黒！まつ黒！白は気でも違ったように、飛び上ったり、跳ね廻ったりしながら、一生懸命に吠え立てました。

「あら、どうしましょう？ 春夫さん。この犬はきつと狂犬だわよ。」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそうな声を出しました。しかし坊ちゃんも勇敢です。白はたちまち左の肩をばかりとバットに打たれました。と思うと二度目のバットも頭の上へ飛んで来ます。白はその下をくぐるが早いか、元来た方へ逃げ出しました。けれども今度はさつきのように、一町も二町も逃げ出しはしません。芝生のはずれには棕櫚の木のかげに、クリイム色に塗った犬小屋があります。白は犬小屋の前へ来ると、小さい主人たちを振り返りました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ。いくらまつ黒になっても、やつぱりあの白なのですよ。」

白の声は何とも云われぬ悲しさと怒りとに震えていました。けれどもお嬢さんや坊ちゃんにはそう云う白の心もちも呑みこめるはずはありません。現にお嬢さんは憎らしそうに、

「まだあすこに吠ほえているわ。ほんとうに凶ずうずう々ずうしい野良犬のらいぬね。」などと、地だんだを踏ふんでいるのです。坊ちゃんも、——坊ちゃんは小径こみちの砂利じやりを拾ひろうと、力一ぱい白へ投げつけました。

「畜ちく生しょう！ まだ愚ぐ図ず愚ぐ図ずしているな。これでもか？ これでもか？」砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、血ちの滲にじむくらい当たったものもあります。白はとうとう尻尾しっぽを巻き、黒塀くろべいの外へぬけ出しました。黒塀くろべいの外には春の日の光に銀ぎんの粉こなを浴あびた紋もん白蝶しろうちようが一羽、気楽きらくそうにひらひら飛んでいます。

「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩もらしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空を眺めていました。

三

お嬢さんや坊ちゃんに逐おい出された白は東京中をうろうろ歩きました。しかしどこへどうしても、忘れることの出来ないのはまつ黒になった姿のことです。白は客の顔うつを映うつしている理髪店りはつてんの鏡を恐れました。雨あま上あがりの空を映している往來おうらいの水たまりを恐れました。

た。往來の若葉を映している飾窓かざりまどの硝子ガラスを恐れました。いや、カフェのテエブルに黒ビールを湛たえているコップさえ、——けれどもそれが何になりまししょう？ あの自動車を御覽なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。漆うるしを光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。——はつきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待の自動車のように、到るところにある訣わけなのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覽なさい。白は苦しうに唸うなったと思うと、たちまち公園の中へ駈かけこみました。

公園の中には鈴懸すずかけの若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂たれたなり、木々の間を歩いて行きました。ここには幸い池のほかには、姿を映すものも見当りません。物音はただ白薔薇しろばらに群むらがる蜂はちの声が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、しばらくは醜みにくい黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかしそう云う幸福さえ五分と続いたかどうかわかりません。白はただ夢のように、ベンチの並ならんでいる路みちばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声が起こったのです。

「きやん。きやん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震いみびるをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間のあいだことです。白は凄じすさまい唸りうな声を洩らすと、きりりとまた振り返りました。

「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

この声はまた白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。

「きやあん。きやあん。臆病おくびょうものになるな！ きやあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へ駈け出しました。

けれどもそこへ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸くびのまわりへ繩なわをつけた茶色の子犬を引きずりながら、何か面白い騒さわいでいるのです。子犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、「助けてくれえ。」と繰り返していました。しかし子供たちはそんな声に耳を借すけしきもありません。ただ笑ったり、怒鳴どなったり、あるいはまた子犬の腹を靴くつで蹴けったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供

たちは驚いたの驚かないのではありません。また實際白の容子は火のように燃えた眼の色
 と云い、刃物の^{はもの}のようにむき出した^{きば}牙の列と云い、今にも嚙^かみつくかと思ふくらい、恐ろし
 いけんまくを見せているのです。子供たちは四方^{しほう}へ逃げ散りました。中には余り狼^{ろうばい}狽^{さい}し
 たはずみに、路^{みち}ばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二三間追いかけた後、^{のち}くるり
 と子犬を振り返ると、叱^{しか}るよう^にこう声をかけました。

「さあ、おれと一しよに来い。お前の家^{うち}まで送つてやるから。」

白は元来^{もとぎ}た木々の間^{あいだ}へ、まつしぐらにまた駈^かけこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、
 ベンチをくぐり、薔^{ばら}薇^{けち}を蹴散らし、白に負けまいと走つて来ます。まだ頸にぶら下つた、
 長い繩をひきずりながら。

×

×

×

二三時間^{のち}たつた後、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇^{たたず}んでいました。昼も薄暗い
 カフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄^{ちくおんき}音機は浪^な花^{にわ}節^{ぶし}か何かやっ
 ているようです。子犬は得意^{とくい}そうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕はここに住んでいるのです。この大正軒たいしょうけんと云うカフェの中に。——おじさんはどこに住んでいるのです？」

「おじさんかい？——おじさんはずっと遠い町にいる。」

白は寂しそうにため息をしました。

「じゃもうおじさんは家うちへ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？ なぜまたそんなことを尋たずねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここに泊とまって行って下さい。それから僕のお

母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳ぎゅうにゅうだの、カレエ・ライスだの、

ピフテキだの、いろいろな御馳走ごちそうがあるので。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんによろしく。」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根の
はずれに、三日月みかづきもそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云われますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ。」

「白——ですか？　白と云うのは不思議ですね。おじさんはどこも黒いじゃありませんか？」

白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白と云うのだよ。」

「じゃ白のおじさんと云いましょう。白のおじさん。ぜひまた近い内うちに一度来て下さい。」

「じゃナポ公、さよなら！」

「御機嫌ごきげん好よう、白のおじさん！　さようなら、さようなら！」

四

その後の白のちはどうなったか？——それは一々話さずとも、いろいろの新聞に伝えられて

います。大かたどなたも御存じでしょう。度々危い人命を救った、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。また一時『義犬』と云う活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白だったのです。しかしまだ不幸にも御存じのない方があれば、どうか下に引用した新聞の記事を読んで下さい。

東京日日新聞。昨十八日（五月）午前八時四十分、奥羽線上り急行列車が田端駅附近の踏切を通過する際、踏切番人の過失に依り、田端一二三会社員柴山鉄太郎の長男実彦（四歳）が列車の通る線路内に立ち入り、危く轢死を遂げようとした。その時逞しい黒犬が一匹、稲妻のように踏切へ飛びこみ、目前に迫った列車の車輪から、見事に実彦を救い出した。この勇敢なる黒犬は人々の立騒いでいる間にどこかへ姿を隠したため、表彰したいにもすることが出来ず、当局は大いに困っている。

東京朝日新聞。軽井沢に避暑中のアメリカ富豪エドワード・バクレエ氏の夫人はペルシア産の猫を寵愛している。すると最近同氏の別荘へ七尺余りの大蛇が現れ、ヴェランダにいる猫を呑もうとした。そこへ見慣れぬ黒犬が一匹、突然猫を救いに駆けつけ、二十分に亘る奮闘の後、とうとうその大蛇を噛み殺した。しかしこのけなげな犬はどこかへ姿を隠したため、夫人は五千弗の賞金を懸け、犬の行方を求めている。

国民新聞。日本アルプス横断中、一時行方不明になった第一高等学校の生徒三名は七日（八月）上高地の温泉へ着した。一行は穂高山と槍ヶ岳との間に途を失い、かつ過日の暴風雨に天幕糧食等を奪われたため、ほとんど死を覚悟していた。然るにどこからか黒犬が一匹、一行のさまよっていた溪谷に現れ、あたかも案内をするように、先へ立つて歩き出した。一行はこの犬の後に従い、一日余り歩いた後、やっと上高地へ着することが出来た。しかし犬は目の下に温泉宿の屋根が見えると、一声嬉しそうに吠えたきり、もう一度もと来た熊笹の中へ姿を隠してしまつたと云う。一行は皆この犬が来たのは神明の加護だと信じている。

時事新報。十三日（九月）名古屋市の大火は焼死者十余名に及んだが、横関名古屋市長なども愛児を失おうとした一人である。令息武矩（三歳）はいかなる家族の手落からか、猛火の中の二階に残され、すでに灰燼となろうとしたところを、一匹の黒犬のために啣え出された。市長は今後名古屋市に限り、野犬撲殺を禁ずると云っている。

読売新聞。小田原町城内公園に連日の人気を集めていた宮城巡回動物園のシベリヤ産大狼は二十五日（十月）午後二時ごろ、突然巖乗な檻を破り、木戸番二名を負傷させた後、箱根方面へ逸走した。小田原署はそのために非常動員を行い、全町に亘る警戒

線を布いた。すると午後四時半ごろ右の狼は十字町に現れ、一匹の黒犬と噛み合いを初めた。黒犬は悪戦頗る努め、ついに敵を噛み伏せるに至った。そこへ警戒中の巡査も駈けつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス・ジガンテイクスと称し、最も兇猛な種属であると云う。なお宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、小田原署長を相手どった告訴を起すといきまいている。等、等、等。

五

ある秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。勿論お嬢さんや坊ちゃんはどうに床へはいっています。いや、今は誰一人起きているものもありません。ひっそりした裏庭の芝生の上にも、ただ高い棕櫚の木の前にも、白い月が一輪浮んでいただけです。白は昔の犬小屋の前に、露に濡れた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独語を始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申

してから、あらゆる危険と戦つて来ました。それは一つには何かの拍子ひょうしに煤すすよりも黒い体を見ると、臆病を恥はじる気が起つたからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼と戦つたりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げ去つてしまふのです。わたしはどうとう苦しさの余り、自殺しようと思ひました。ただ自殺をするにつけても、ただ一目ひとめ会いたいののは可愛がつて下すつた御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんをあしたにもわたしの姿を見ると、きつとまた野良犬のらいぬと思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまふかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見るほかに、何も願うことはありません。そのため今夜ははるばるともう一度ここへ歸つて来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わせて下さい。」

白は独ひとりごと語を云い終ると、芝生しばふにあぐらをさしのべたなり、いつかぐつすり寝入つてしまいました。

×

×

×

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだろう？ 姉さん。」

白は小さい主人の声に、はつきりと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇たたずんだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝生の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんも白が真っ黒に変わった時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——白は今では帰って来たことを後悔うかいする気さえ起りました。するとその途端とたんです。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこ
う叫びました。

「お父さん！ お母さん！ 白がまた帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょうか。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかりと白の頸くびを押えました。同時に白はお嬢さんの目へ、じつと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳とうにありありと犬小屋が映うつっています。高い棕櫚しゅろの木のかげになったクリイム色の犬小屋が、——そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒こめつぶほどの小ささに、白い犬が一匹坐まっているのです。

清らかに、ほっそりと。——白はただ恍惚こうこつとこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を抱だきしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——御覧なさい、坊ちゃんの威張いばっているのを！

「へっ、姉さんだって泣いている癖に！」

(大正十二年七月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「女性改造」

1923（大正12）年8月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：j.utyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2012年3月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白
芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>